



- ①グリフォン
- ②ケンタウロス
- ③ユニコーン
上記3点『ドン・ファン・デ・アウストリアの動物誌』（ファクシミリ版、民博図書資料 F112002561）より。同書は1570年ごろに制作され、スペインの王族ドン・ファン・デ・アウストリアに捧げられた動物誌。実在の動物だけでなく、不可思議な生き物や民族についても絵入りで解説されている。
- ④マカラ（寺院入口装飾用木彫）、ネパール、H0148680
長い口をもち、海に住む伝説上の怪獣（写真、向かって左下）。
- ⑤金の鯨（置物）、愛知県、幅5.7×奥行1.7×高さ4.2cm、H0014562
- ⑥スフィンクス人形、エジプト、幅2.8×奥行5.1×高さ3.9cm、H0015229
- ⑦ガネーシャ神像、インド、幅17×奥行15×高さ31cm、H0092628
- ⑧牛鬼人形、愛媛県 宇和島市、幅5.3×奥行4.1×高さ18cm、H0026695
- ⑨人魚（土人形）、メキシコ、幅13×奥行6.6×高さ17cm、H0132092

似たモノ
さかし

似てるけどどこが違う
似てないようでどこか似てる
いろんな工夫や思いを映す
みんなの所蔵資料

ちゃんぽんな獣たち

立川 武蔵 民博 名誉教授

各国の「合成・ちゃんぽん」のなかから似たものがしをせよ、という電話が『月刊みんなの』からかかってきた。それ以来、我が家では論争が続いている。「名古屋名物」のミンカツは「合成」か否か、というのが争点だ。わたしは、「単なる同居だ」と反対する。ひつまぶし、天むす（天ぶらいりおむすび）にかんしても意見がわかれる。

天空を駆けるワシと野の王者ライオンを合成しようという古代人のもくろみは成功した。幻獣グリフォン（グリフィン）はヨーロッパから日本にいたる地域で有名だ①。日本のある会社のロゴマークにもなっている。ミンカツとはスケールが違う。

人の顔とライオンの胴体の合成作品スフィンクスは、すこし迫力に欠けるが、



石の姿を今に残している②。胴体から上がヒト、下が馬という組み合わせ（ケンタウロス）は誰もが考えそうなものだが③。競馬場でウマたちのお尻を鞭で叩いている騎手たちは「この馬に羽があったらな」と思うにちがいない。オスプレイの代わりに羽のある馬ベガサスが空港に降り立つということなら、わたしは見に行く。

山羊座は、エジプトでは上半身ヤギ、下半身は魚だったそうだ。この「合成獣」はインドで口はワニ、胴はクジラの海獣マカラになった④。やがて、ネパールでは足や翼も生えた。中国では鱗のある魚となり、名古屋ではとうとう「金のしゃちほこ」になった⑤。ちなみに金羅のサンスクリット「クンビラ」はマカラのことだ。こうなると合成とちやんぽんとかいう域を超えている。



古代の人びとはなぜこうした「合成獣」を考えたのか。理由はよくわからないが、ともかくそうしたもののが欲しかったことは確かだ。なぜ欲しかったのか。「聖なる」シンボルにするつもりだったのか、人をおどかさつもりだったのか。現代人の怪獣とかわらない、とわたしは思う。

これらの古代の「創造的合成」はかわいらしい。だが、現代の「合成」、たとえば遺伝子組み換えは恐ろしい。その姿は見せないのだが、人間たちの命を左右するかもしれない。生命が合成されると、それは自己増殖する。そして、人間たちの制御を超える危険性もあるのだ。

我が家の論争は続いている。ひつまぶし、つまりお茶漬けとウナギの組み合わせは創造的合成だとわたしは主張する。これはゆずれない。

